

総括セッション

○アチェアポン教授

ありがとうございます。それでは、そろそろ総括に参りたいと思います。本日のフォーラム全体についての気付きを、お一人につき2、3分ずつでお願いしたいと思います。

○阿部教授

今日は大変刺激的な1日でありました。さまざまな観点から教育を見直すことができ、大変幸せな1日でした。ありがとうございます。3点短く申し上げます。

1点目は井上さん、インプラシッタさんもおっしゃいましたが、問いを立てる能力も含めて、メタ認知能力、仮説設定能力、批判的思考力などの力を、子どもたちに権利として獲得させていかなければいけないと思っています。これは職業人としてもそうですが、市民としても主権者としても、そういう力がないと、国や社会の主人公になれないということだと思います。ですから、ないよりはあったほうがいいのではなく、そういう学力・能力を付けることは世界の全ての子どもたちの権利なんだということを、再度確認する必要があります。そうだとすると、さまざまな指導方法があってもいいとしても、やはりアクティブラーニングの手法はこれから必須になってくる。できるだけ教師は身に付けたほうがいいのではなくて、全ての教師がアクティブラーニングの授業ができるようにする必要があると思います。そういう点では、例えばアチェアポンさんのスピーチでも、実際グループワークで大変成果を上げているということがございましたので、できるところからどんどんやっていく必要があると思います。

2つ目です。インプラシッタさんが、大学数学と学校教育があまりにもかけ離れているとおっしゃいましたが、これは日本も全くそのとおりだと思います。そういう点では教師は専門職ですので、もっと質の高い大学や大学院レベルの専門的な知識や研究力を持っていないといけないと思います。一方では教師は実践家でもあります。それら両方を磨く時間が足りない。教師が専門職として研究、教材研究をする時間があまりにも少ない。授業の準備をする時間も少なすぎる。共同で授業研究を時間も足りない。こういう事態はとても困ったことです。この状態が改善されないままであることを、たいへん恐れます。これは日本だけではないはずですが、これからお国の教育を大きく改革していこうと考えていらっしゃる方もそうだと思いますが、教師を専門職として研究や授業の準備をするような条件をつくっていかねばいけない。そういう意味では、チョウドリーさんがおっしゃったように、これは予算の問題であり、どれを優先順位にするかということだと思います。

ちなみに日本は、OECD諸国の中でも、GDP比で教育予算が最も少ない。今日は文部科学省の皆さんもいらっしゃいますが、文部科学省の責任とだけ言うつもりはありません。財務省にも頑張ってもらわないといけない。ぜひ文部科学省の皆さんから財務省の皆さんに働き

かけをしていただきたいと思います。いずれ予算の問題も含めて一緒に考えていかなければいけないし、これは日本だけの問題ではないと思っております。そういう点で先ほどもから論議されているように、さまざまなレベルで、さまざまな団体、NGO、保護者、そして教育委員会、行政などいろいろなところから、そしていろいろなところに働きかけをしながら変えていく必要があると思います。

最後に3番目です。国枝さんが国ベースだけでなく、保護者などの力が大事だというご発言がありました。先ほどの繰り返しになりますが、実は秋田県とか福井県については学校教育のことしか申し上げませんでした。保護者や社会的な地域の住民の学校や教育に対する支持が大変強いのです。学校は大切だ、先生方の指導は重要なものだというような、そういった県民の世論が非常に強いのです。こういうものがあって、実は秋田県や福井県の教育が成立していることを忘れてはいけません。これは何となく保護者や地域が学校を支持しているというのではなく、学校側から保護者や地域にさまざまな働きかけをしています。そういう点では、今日は話題になりませんでした。日本だけの問題ではなく、学校と家庭と地域といったつながりをつくりながら、同時に教師の専門職としての専門性を高めていくというような戦略が、どの国でも必要になってくるのではないかと考えています。

今日は大変素晴らしい1日を経験させていただき、本当にどうもありがとうございました。

○司会

ありがとうございました。続きましてインプラシッタさんをお願いいたします。

○インプラシッタ教授

はい、ありがとうございます。非常に重要なイベントに参加させていただき、ありがとうございました。実際、私はカリキュラムの専門家ではありませんが、もともと教師であり、その後に教育の裏方に回りました。やはり私の国では非常に大きなギャップがあると感じました。通常なかなか現場に行くことがなく、行ってもせいぜい10分、15分も見て戻ってしまうという状況でしたが、それが30年計画の一環で変わりました。SDGsの目標を考えたときにそれも念頭におくべきだと思います。

15年前にこのプロジェクトを始めたとき、磯田正美先生と清水先生がいらっしゃっていますが、例えば50年ぐらいかかるのではないかとということも一部で言われましたが、実際に始まったあと、15年たちましたが、学校のレベルでいろいろと変化も見えてきました。今では、政策決定者にいろいろと情報提供をすることもできるようになってきました。そして教育省も予算を組み、全国の人口の3分の1が集中しているタイ北部の最貧地域にプロジェクトを導入しました。ここから始まり、他の地域にも横展開をして広げてきました。

このためにもコラボレーションが必要です。タイと日本はそのいい例だと思います。それが12年にわたってこのAPEC授業研究プロジェクトを実行してきました。例えば、デモ

ンストラクションで授業をやり、それを見てわれわれが目指すべき目標だと見せてもらい、日本を参考にし、テキストも参考にし、自分たちの国に合わせて必要な変更を加えて、大学のネットワークを構築しました。私の大学の博士課程の学生たちが一部ここにもおりますが、20 大学で、45 人ぐらいはコンケン大学の卒業生で、現在はいろいろな大学に散らばって仕事をしてくれています。SDGs のゴールの中で、私にいわせると、S (持続可能性) というのは、やはりまず開発の前に持続性でありきだと思えます。諦めるのではないということです。この取り組みを私は 15 年間やってきた経験があるので、振り返ることができる、そしてそれを開発に生かすことができる、まず開発をして、その後持続可能性を考えるのではなく、そのまず持続可能性を考えた上で、プラス、開発だと思えます。ありがとうございました。

○司会

ありがとうございました。引き続き、井上先生お願いします。

○井上教諭

井上でございます。今日一日、いろいろとありがとうございました。自分がこれまで持っていた教育観をいったん脇において、新たな良いものをつくり続けられないかという視点で今実践しています。まさに今日一日で、今、持っている自分のスタイルに改善の余地があると気付かされました。

この 1 時間、会場からの皆さまからのご質問を聞いていて、本当にいろいろなことが頭をよぎりました。とりわけ、一番頭に残っているのはアクティブラーニングを含めていろいろな教育手法は果たして誰のものなのかということだと思っております。私は日々、現場で教育をしていますと、手段として採用しているはずの手法が、いつの間にか目的化してしまい、探求学習をするために何かをする、アクティブラーニングをするために何かをするということで、いつか手段が目的化してしまう部分がありますが、自分の今、それに陥っていないかということを考えました。

今日登壇された皆さんも、各国、各学校でそれぞれ課題を抱えている状況で何とかしたいと、これは世の先生方も同じ思いではないかと思えます。やはり課題を発見したり、解決したりする能力を生徒に望むのであれば、教員がそれをできなければいけないと非常に強く感じています。明らかに目の前の生徒が困った状況にある、これが課題ですよね。それに対してどういうアプローチで解決をしていくのかというときに、狭い視野で考えても開けない部分があります。

今日は日本の教育の輸出入のような話も少しでましたが、もちろん、独りよがり押し付けるかたはいけません、それぞれの国の教育者が課題を発見し、解決したいと感じたときに、選択肢としていろいろなかたちの教授法にアクセスできるような準備があるといいなと思いつつ、今日はお話を伺っておりました。その中の一つに日本式のものもあってい

いかと思っております。押し付けるのではなく、それぞれの教員がクリティカルに現場を見つめ、解決するときに自分の手元に選択肢がたくさんあるという状況ということが、すごく大事ではないかと思っております。

メタ認知の話が今日は何度もできてきましたが、私も今それにこだわりながら授業実践をしております。ただ一方で、私が今考えている1番の問題は、打算的な学習と申しますか、役に立つ学習に、生徒が非常に傾倒しつつあるということです。すぐに分かるもの、すぐに役立つものに飛びつくわけです。ですので、TOKもそうですが、実社会の状況につなげることをやり過ぎると、実社会につながらない知識は価値がないというようになります。そうではないと私は思っています。概念化された知識は頭の中に残り続けて、生徒が10年後、20年後、30年後、予測不能な状況に出くわすときに、それがパッと浮かぶような状態にしたいと私は感じています。実社会につなげることももちろん重要ですが、それと共に今すぐ役に立たないものに対する価値付けも生徒にアピールしていきたいと感じました。以上です。

○司会

ありがとうございました。続きましてラシェッドさん、お願いします。

○チョウドリー教授

ありがとうございます。本日は開眼されるような日でした。特にこういったさまざまな関係者の方々がお話をされましたし、フロアからもさまざまな質問があり、私にとって大変豊かになるような日でした。私は草の根活動をしていますが、このような会議に参加して対話をすることで考えさせられます。国に戻ってから、国民に対して教育の実践者や教育の受け手に対して、キャンペーンをするものとしてどういった責任があるかということを考えさせられます。大変素晴らしい事例があったと思います。例えば阿部教授はアクティブラーニングについてお話しされました。こういったことはさまざまなかたちで私の国において試そうとしています。皆さんもそうだと思いますが、目に見えるものがでてきていて、それを採用することができる、そこから状況に合わせて学びを得ることが可能だと思います。

しかし、ここで重要な質問というのは、阿部先生もおっしゃっていたように、政府に対する働きかけが必要で、それは市民集会の役割だと思います。多くの国でいろいろとでているのは、Global Campaign for Educationということで、パートナーやメンバーとともに100以上の国で仕事をしています。NGOや大学などが協力をして、同じ目標に対して並行して仕事をしているけれども、協力し合っていません。そこは改善の余地があると思いますし、アクションポイントだと思います。私たちはそこに注力すべきだと思います。そしてこのフォーラムを通じて、協力し合って学び合うことができると思います。

やはり三つのことが必要だと思います。一つは、3Cと呼ばれるものだと思います。コンテキスト（脈絡）、キャパシティー（私たちの能力、リソース、財務的な資源など）そしてコミットメントです。政府からだけではなく、自分たち自身のコミットメント（確約）が必

要です。何かを実行し、最終的にはその地域社会、両親、学習者にとって恩恵に資するメリットがあるものでなければいけません。そして現場からでてくるハードエビデンスでもって、研究者はデータを生成していくことが重要です。阿部教授が言われたような、しっかりとしたエビデンスがなければ、結局はうまくいかないわけです。今そういったところが私たちが行動を起こしてデータを収集していかなければいけません。

あともう一つ私が注目したいのは、もう少し議論すべきだったのは、若い初等教育の子どもだけではなく、中等教育、大学のレベル、彼らに対して耳を傾けなければいけません。そういうことを私たちはやっていません。阿部教授もおっしゃっていたと思いますが、教師はただ教えるだけです。それで終わりです。対話が重要というのは分かりますが、子どもたちに耳を傾けることによって問題を解決できると思います。この点に関しては、もっとやるべきことがあると思います。ありがとうございます。

それから、現場での経験からいろいろなことを学ぶことができます。それを見ると、実際にどうやってこのアクティブラーニングを実践するかが分かります。こういった人たちこそ、新しい役割、新しい授業を楽しみにしているわけです。現場にも耳を傾けることも重量だと思います。本日は、本当にありがとうございます。ご参加いただいてありがとうございます。そして、こういった草の根の活動をやっている私がこういった世界的な素晴らしい方と席を同じにすることができて、大変うれしく思います。文部科学省に感謝いたします。

○司会

ありがとうございます。それでは国枝さんお願いいたします。

○国枝専門員

まず、本日参加して下さった皆さま、本当に今日は活発なご参加を誠にありがとうございました。私自身、非常に学びの多い場となりました。特にアフリカの現場でいろいろなプロジェクトで、各国の教育省や学校の関係者、先生、保護者、住民と日々、出張ベースで仕事をしていますが、なかなかそれぞれの国の文脈であったり、大変な状況に触れる中で、ある意味、こうしたらいいのではないかと思っても、心が折れてしまうことが多々あったと思います。それが今日この場で1日議論させていただいて、やはり自分自身が思考停止に陥ってはいないかと反省しました。いろいろな各国の障害、難しさというのはあるのですが、例えば今日の大きなテーマであるアクティブラーニングが、基本的に子どもたちの生きる力、人間力を変えていく、高めていくということは、アプローチとしては私自身も理解しているところです。何とかそういったアプローチを各国に広めていく、アプローチを広めるというよりは、子どもが本当に学べるようになるかどうかを見据えてやっていかなければいけないと思ったところです。

今朝の阿部先生のプレゼンテーションの中で、このアプローチ、アクティブラーニングについては、やはり教員の負担といいますか、準備が必要というところで、やはり保護者や地

域のサポートなど、何とか学校の先生が授業に専念できるようなサポートを、先生の仕事だから先生がやればいいではなく、やはり周りで支えていくという姿勢が大事だと、今まで私も考えていたことですが、改めて実感した次第です。

今日、議論しながら、今度アフリカで何ができるかいろいろ考えていました。これも別に答えがある話ではないのですが、例えばアクティブラーニングなり、子どもが直接能動的に学べるようになる取り組みをするとき、アフリカの学校で、50人のクラス、100人のクラスに先生が1人、場合によっては1人もいないという状況で、どういったことができるのか。

「いや、そこではできません」と言うのではなく、クラスの中で、50人いるとできる子とできない子が一緒にいますが、例えば学年を縦断的に習熟度別に分けて、そこでアクティブラーニングを入れるとか、それをカリキュラムが邪魔するなら、授業ではなく補習というかたちでやるとか、自分たちが「こうあるべきだ」とか、「こうしかできない」という垣根を取り払って、とにかく子どもが本当に学べるようになるようなアプローチを、われわれは日々考えて実際にやってみるということを、これから実践していかなければならないと1日の会合に参加させていただきながら、何となく考えておりました。

われわれ、これからですが、ぜひ今日、皆さんにいただいたさまざま厳しいご質問もありましたけれど、日々の活動に生かしていきながら、何とか世界の子どもが学べるような、より多くの子どもたちが本当に学べるように、日々努力していかなければと思った次第です。本日はありがとうございました。

○司会

ありがとうございました。それでは最後、アチェアポン先生お願いします。

○アチェアポン教授

ありがとうございます。私も皆さまに感謝申し上げたいと思います。いろいろ貢献をしてくださいました。プレゼンテーションをされた方だけでなく、コメントや質問からいろいろ学ぶことができ、大変豊かになる日だったと思います。

今日の会議のテーマの「教育の質」ということですが、学習指導者に関わることだと思います。全てのプレゼンテーションが、学習者にフォーカスしていたと思います。学習者にどのようにして質の高い教育を提供できるか、また、カリキュラムにフォーカスを当てたプレゼンテーション、あるいは学習への責任があるのは誰か、そして学習者が中心になっているやっっていくということ。これらを聞いて思ったのは、20年30年といってもすぐに時間がたってしまうということです。国枝先生がおっしゃったように、既にもう10%の時間は過ぎ去ってしまっています。議論したことやリサーチの結果全てを行動に落としこまなければいけないと思います。

いろいろな斬新なものを学びました。どういった国、脈絡、日本であろうと、アフリカであろうと、アジアの国であっても、ここで重要なのは、いろいろなやり方の中核には学習者

を置くということ、子どもが学べるようにするという事です。なので私は希望はあると思います。アジェンダを前進させるということです。話をするだけではなく、私たちはこの現実や課題についても話をしました。そして可能性についても話ができたとをうれしく思います。いろいろな課題についてマッピングをしましたけれど、解決策も見いだしてきたということです。このアクティブラーニングによってどうやって多くの学習者に改善をもたらせるかというような見込み、見通しもできてきたと思います。ですので、明確なメッセージがでてきたと思います。私たちのコミットメントがどうあるべきなのか、私たちがどう考えて、それぞれの肩書で何をすべきかが分かってきたと思います。そして常に学習者が中心でなければいけない EFA というのをいいますと、やはりアクセスということについては、そして今、学びということがあります。時に、多くの子どもはアクセスがないところで戸惑ってしまうところがあります。ただ、子どもにとって意義のある学び、質の高い教育、学校だけではなく、学校に来ない子どもたちも学べるようにすると、なので本当に元気づけられるような学びがありました。皆さま、どうもありがとうございました。

○司会

アチェアポン先生のほうで簡単にまとめていただきましたので、わたくしのほうからは一点のみお伝えしたいと思います。本日の演題は「SDGs が求める教育の質：教育政策の現状と課題」でした。本日、何度も出てまいりましたアクティブラーニング、主体的、対話的で深い学びは、先進国に限られた学びではないのではないか。そしてその中で時間というものをどう確保していくべきかという視点、また学校、家庭、地域の協力体制、またどのように行政に働きかけていくか、どのような対話を持っていくかという課題のような視点も提示されました。

南アフリカの元大統領で有名な方、ネルソン・マンデラ氏。有名なノーベル平和賞の受賞者でございますけれども、このような格言を残しております。『教育とは世界を変えるために用いることができる最も強力な武器である』。英語ですと、『Education is the most powerful weapon which you can use to change the world』。包摂性と公正性を軸に置き、平和を追求する持続可能な開発の促進には今後、どのような教育が必要になっていくのか。本日のフォーラムが皆さまに何らかの示唆を提供することができたとしたしますならば、主催者の一人として大変幸甚に存じます。

それでは、以上を持ちまして、持続可能な開発目標に向けた国際開発のフォーラム（JEF for SDGs Program）を全て終了いたします。主催 4 団体に代わりまして基調講演者、パネリストの皆さま、最後まで熱心に議論を盛り上げてくださった会場の皆さまに心より感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

またこのフォーラムを後援いただきました国際協力機構 JICA さま、そして皆さま後方にいらっしゃいます、終日素晴らしい通訳をしてくださいました通訳の方々にもお礼申し上げます。本日はどうもありがとうございました。また、フォーラムにお手伝いくださいまし

た学生の皆さん、どうもありがとうございました。最後に、数カ月にわたる準備を手伝っていただきましたフォーラム事務局の皆さん、および主催 4 団体の関係者の皆さまにも深くお礼申し上げます。どうもありがとうございました。

最後にですが、短いお願いと連絡がございます。まず1点目ですけれども、お帰りになる前にぜひ水色の評価シートのほうを提出いただければ幸いです。記入されたシートですが、後ろの出口にあります。事務局のスタッフのほうに渡していただけますか、直接受付に置いてある箱の中に入れていただければと思います。こちらのアンケートは、後日オンラインでもアクセスが可能です。明日までにご提出いただきましたものは全てこちらで集計させていただきます、後日、ウェブにて公開させていただきます。

それからこちらのレシーバー、毎年何人かお持ち帰りになってしまわれる方がいるようなのですが、これはお持ち帰りにならないようにお返してください。どうぞよろしくお願いたします。

それでは皆さま、本日は雨の中、お足元が悪い中おいでくださり、また長い間、午後のセッションが終わりますまでお付き合いくださいましてどうもありがとうございました。当フォーラムは先ほど最初に申し上げましたように、登壇者の皆さまとフロアの皆さまの対話、今日のキーワードでございます対話を非常に重視しております。本日たくさんのご意見、そしてご質問等をいただき、活発に議論を盛り上げてくださいましたフロアの皆さま、そしてそれに対して熱心にお答えくださいましたご登壇者の先生方、皆さま本当にどうもありがとうございました。

それでは時間になりましたので、最後に拍手を持って第15回 JEF for SDGs を終了とさせていただきますと思います。皆さま、どうもありがとうございました。